子育て支援に参加した母親の子育て意識の変容
－８名の母親の語りから

岡　村　幸　代[1)]

Transformation of consciousness of child rearing among mothers participating in childcare support programs: From discussions with eight mothers

This study analyzes statements by eight mothers who had experience participating, together with their children, in courses held by community centers roughly twice monthly to support the raising of children, to identify the process of transformation of the mothers' consciousness of child rearing. Its methodology employs a type of qualitative research method called a trajectory equifinality model to identify clearly diversities and commonalities in the paths by which mothers' consciousnesses of child rearing were transformed, along an irreversible timeline.

The results of analysis of the path by which consciousness of child rearing was transformed showed a process in which mothers grouped into each of two categories underwent a process in which they noticed new things by spending time together with their children, as their consciousness was transformed to one of raising children while providing support to and receiving support from others within their interpersonal ties. We also found that their relations with instructors and friends provided mothers with support within this process. Changes also arose within the household. This led to the view that the role of support personnel at a facility providing support for child rearing is to provide a place where parents and children can share experiences together while also providing conscientious assistance to mothers.

Ⅰ　はじめに

核家族化や少子化等の社会的背景のなかで、子育て支援の役割が重要性を増していることは言うまでもない。平成27年度から開始した〈子ども・子育て新制度〉に伴い、〈地域の実情に応じた子ども・子育て支援〉も強化される見通し（内閣府　2012）であり、家庭で過ごす子どもとその母親が、より一層支援につながりやすいシステムが整っていくものと思われる。地域では、公共施設や園など身近な場所で子育て支援事業が実施されており、親子の交流や育児相談ができる場が拡充している。現在、３歳未満の子どもを持つ女性の約８割は家庭で育児をしている（内閣府　2014）とされるが、現代の母親たちは彼女たちの成長過程において、公教育や家庭で実践的な保育教育を受けることなく親になっている場合が多い（岩堂　2008）。また、結婚後や転勤先での慣れない土地での生活や核家族であること、あるいは仕事の影響で、地域社会での人間関係が少ないまま子育ての生活に入る母親も多数いる（篠田　2008）。こうした背景から、地域でのつながりをもつことなく孤立している親と子どもも少なくないと思われる。このような現況をふまえ、母親と子どもを真の意味で支える支援を提供するためには、母親

1）ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科、臨床心理士

の理想像にとらわれた支援や画一的な支援ではなく、母親個人の主観的な生き方を援助する中で見えてくるものから得られる示唆（青木　2009）を社会に提言し、より「個々の親、子、家族の生きる姿が見えてくるような支援」（東山　2010）の実践を重ねていくことが望まれる。

岡村らは、地域で行う子育て支援の講座に子どもとともに参加した母親の心理に着目して研究を行っている。今までに、子育て支援への参加が子どもの成長だけでなく、ともに参加した親の意識や気分の肯定的な変化を促すことが明らかにされ、子育て支援が親子にとって意義ある活動であることが示されてきた（岡村・平松　2013）。さらに、岡村・湯澤らは、母親を社会と関わりながら子育てをする存在として捉え、未就園児対象の子育て支援の講座に子どもと一緒に７年間参加した１名の母親を対象者として、子育て観の変容について質的分析を行った。その結果、母親の子育て観が、当初の緊張感を伴うものから無理せず自然なものへと変容し、曖昧さへの耐性も生じたことが分かった。また、子育て支援の役割は、子どもや母親自身が成長できる場の提供だけでなく、家族に生じた危機的状況からの回復を早める働きがあったことが示された（岡村・湯澤　2014）。その際の課題として、子育て支援の講座に参加する母親のニーズや背景、子どもの様子、講座での体験は多様であることが予想されたため、対象者を増やして調査することが挙げられた。また、大部分の母親は半年から２、３年程度の参加であるため、参加初期の体験に限局して子育て意識の変化を短期縦断的に分析し、支援のありかたを考えることも課題として挙げられた。

そこで、本研究では、月２回程度の子育て支援講座へ持続的に参加した経験がある８名の母親にインタビューを実施し、母親が初めて講座に参加した当初１～２年の経験を中心に話を伺った。分析法として用いたのは、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下 ＴＥＭ）という質的研究法の一つである。ＴＥＭはヴァルシナーとサトウらが生成したモデルで（サトウら　2006）、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする質的心理学・文化心理学の方法論である（安田・サトウ　2012）。具体的には、人間が外界と相互交渉しながら行うその時々での選択（分岐点）、選択によって生じる多様な径路（複線径路：Trajectory）、何らかの最終状態（等至点：Equifinality）という概念を用い、等至点へと至る多様性を非可逆的時間軸に沿って明らかにする（サトウ　2009）。ＴＥＭは１人のデータでも、多人数のデータでも扱うことができ、インタビュー対象者が９±２人であれば、径路の類型を描くことができるため（安田・サトウ　2012）、今回は８名の母親を対象者とした。

以上のことから、本研究ではまず、８名の母親の語りをＴＥＭを用いて分析する。その際、子育て支援講座に参加した母親の心の動きを検討し、子育て意識が変容する過程を径路として描くこととする。また、径路の共通性と多様性、類型を明らかにし、母親の心情に沿った支援のあり方を考える。

Ⅱ　方法

インタビューは、子育て支援講座に参加経験のある８名の母親から許諾を得たうえで、2013年８月～2015年３月に実施した。対象者である８名の母親（以下、Ａ～Ｈさん）はすべて専業主婦であり、属性については表１に示した。

母親たちが参加した子育て支援講座は、某市立公民館の主催講座であり、参加対象者は未就園児とその保護者である。活動は月２回程度、１回の活動時間は１時間半で、参加する親子は15組前後である。なお、参加者は、半年毎に申し込みを行って、クローズドグループで参加する。講師は、保育士資格を持つ50代女性で、公民館の子育て支援講座を十数年担当した経験がある。なお、講座を主催している公民館は、政令指定都市の郊外に立地し、マンションや戸建てが並ぶ住宅街の一角にある。講座の利用者は地元出身者だけでなく、

表１　子育て支援講座に参加した母親の属性

母親	母親の年齢（参加開始時）	子どもの年齢（参加開始時）	初めて参加した子どもの生まれ順	家族形態
Ａさん	30代	２歳	長子	４世代
Ｂさん	30代	２歳	長子	核家族
Ｃさん	20代	１歳	長子	核家族
Ｄさん	30代	９か月	第二子	核家族
Ｅさん	30代	３歳	第二子	核家族
Ｆさん	40代	３歳	第二子	核家族
Ｇさん	30代	２歳	長子	核家族
Ｈさん	20代	３歳	長子	３世代

いわゆる転勤族も少なくない。

講座の内容は、身体を使った遊びや、描画、工作、歌、絵本、自由遊び、季節の遊びなどであり、毎回、講師の指導のもと、親子で様々な遊びができるように工夫されていた。また、活動の最後には、母親相互の友達づくりを目的とし、子どもに自由遊びをさせながら、母親どうしもしくは母親とスタッフが自由に話をする時間が20分程度設けられている。この時間を利用して、母親対象のストレッチを行う回もある。

インタビューでは、子育て支援講座に参加を始めた頃から現在までの対象者の体験を、子育て支援講座に参加してからの母子の関わりや母親の心境の変化を中心に語る半構造的インタビューの形式を採用した。また、協力をお願いする際に、インタビューの時間は30分から40分程度である旨を案内した。実際にかかったインタビューの時間は、10分から95分、平均時間は33分だった。10分の母親についてであるが、インタビュー時におおよその質問について回答した後、子どもの体調が悪くなったため、短い時間になった。95分の母親については、母親が言葉を一つ一つ選びながら心情を語る過程をともにする方がその場の状況として自然であったため、予定時間が超過した。さらに、インタビューは、個人情報などの留意事項を説明したうえで、許可を得て録音した。音声データを逐語記録として文字化し、ＴＥＭを用いて分析を行った。なお、10分のインタビューから得られたデータについては時間的バランスの偏りが懸念されたが、半構造化面接によりほぼインタビューの主旨を充足していたため分析に加えた。

ＴＥＭ理論の基本概念（上田　2011）は表２に

表２　ＴＥＭ理論の基本概念（上田　2011参照）及び本研究における意味

基本概念	内容	本研究における意味
必須通過点	論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるを得ない点	子どもとの過ごし方を考える
分岐点	ある経験において、実現可能な複数の径路が用意されている状態の地点	子育て支援講座に参加するか否か 子どもが「楽しそうに」参加していると読み取るか否か講座への参加を継続するか否か
等至点	多様な経験の径路がいったん収束する地点 等至点は一つではなく、それと対になり得る補集合的な等至点のことを「両極化した等至点」という	つながりのなかで、支え・支えられる子育て（等至点） 孤立した子育て（両極化した等至点）
社会的方向付け 社会的ガイダンス	選択肢における個人の選択に有形無形に影響を及ぼす力を象徴的に表すもの（特に肯定的なものを社会的ガイダンス、否定的なものを社会的方向付けとする）	子どもと母親をとりまく環境 講師や友人など他者の支え 子どもの様子・変化

示した。分析は文献（上田　2011、サトウ　2009、岡村・湯澤　2014）を参考にして行った。まず、①音声データから、コーディングが可能なように発話内容に従って切片化を行った。②それぞれのカードについて、切片化された文章のみで意味が分かるように、コーディングを行った。③カードを時系列に沿って並べた。④時系列に並べたA～Hさんのカードを内容ごとに分類し、それぞれに内容を端的に表すようなラベルを付けた。⑤内容の関係性を考慮しながらネットワーク化を行った。⑥〈等至点〉、〈両極化された等至点〉、〈分岐点〉、〈必須通過点〉を検討した。⑦ＴＥＭ図を作成するとともに、データでは得られないが理論的・制度的に存在すると考えられる選択や径路についても検討した。⑧段階Ⅱでの母親の体験に応じた支援や関わり方を考えるために、それぞれの母親が段階Ⅱに要した時間、当初の母親の心情、母親から見た子どもの様子をもとに類型化を試みた。

Ⅲ　結果

ＴＥＭ理論の基本概念（表２）に基づき、ラベルと基本概念を対応させた。必須通過点として【子どもとの過ごし方を考える】を設定した。分岐点として、インタビュー対象者は参加を選択したが、否という選択肢も本来あった可能性を考え、【子育て支援講座に参加するか否か】を設定した。また、講座に参加して間もない頃の我が子の様子を、楽しそうに参加していると読み取った母親と、嫌がったり緊張したりしていると読み取った場合があり、【子どもが「楽しそうに」参加していると読み取るか否か】とした。さらに、講座への参加の継続は半年ごとに行われており、インタビュー対象者は結果的に全員参加を選択したが、迷いながら選択した対象者もいたため、否という選択肢も本来あった可能性を考え、【参加を継続するか否か】を設定した。等至点として、子育て支援に参加を始めてから１～２年後に導かれた子育て観として、【つながりのなかで、支え・支えられる子育て】とした。それに対になり得た子育て観として、【孤立した子育て】を想定した。また、社会的方向付け並びに社会的ガイダンスとして、【子どもと母親をとりまく環境】【講師や友人など他者の支え】【子どもの様子・変化】と想定した。

母親の語りから得られた子育て観の時間的変容過程を、基本概念とともに、図１に表す。時間的変容過程を子育て支援と母親との関わり方の変化の観点から分類すると、「Ⅰ：子育て支援講座の利用を考える段階」「Ⅱ：他者に支えられながら参加を継続する段階（３カ月から半年、もしくは１年から２年）」「Ⅲ：講座や家庭で子どもと一緒に活動する段階」「Ⅳ：講座に余裕を持って参加する段階」という形で移行してきた。以下に、母親の語りの内容と各時期における子育て支援の特徴を示す。また、各段階でのラベルと語りの一部を表３に示す。

１）Ⅰ：母親が子育て支援講座の利用を考える段階

段階Ⅰでは、母親が当時の子育て観や母子をとりまく環境（社会的方向付け）をもとに、母親が多様な側面から子どもとの過ごし方を考える経緯が示された。必須通過点として【子どもとの過ごし方を考える】を設定した。

当時の子育て意識として、【子どもと向き合うのがストレス】、【子どもが離れず幼稚園が不安】、【闘病が長く心配し続けた】、【他の母子と関わりたい】と語った母親が複数おり、ラベルを付けた。転勤族であることや家族構成等は、当時の【家庭の事情】とした。また、すでに【他の子育て支援活動に参加した経験】のある母親が８名中７名いた。さらに、参加経験のある他の母親から話を聞いて講座に参加した母親が３名、講座のチラシを見て申し込んだ母親が７名にのぼり、母親たちが【口コミ・チラシ】を参考によりよい支援を求めて情報を収集している姿が垣間見えた。これらは、社会的方向付けもしくは社会的ガイダンスとして捉えることができ、必須通過点である【子どもと

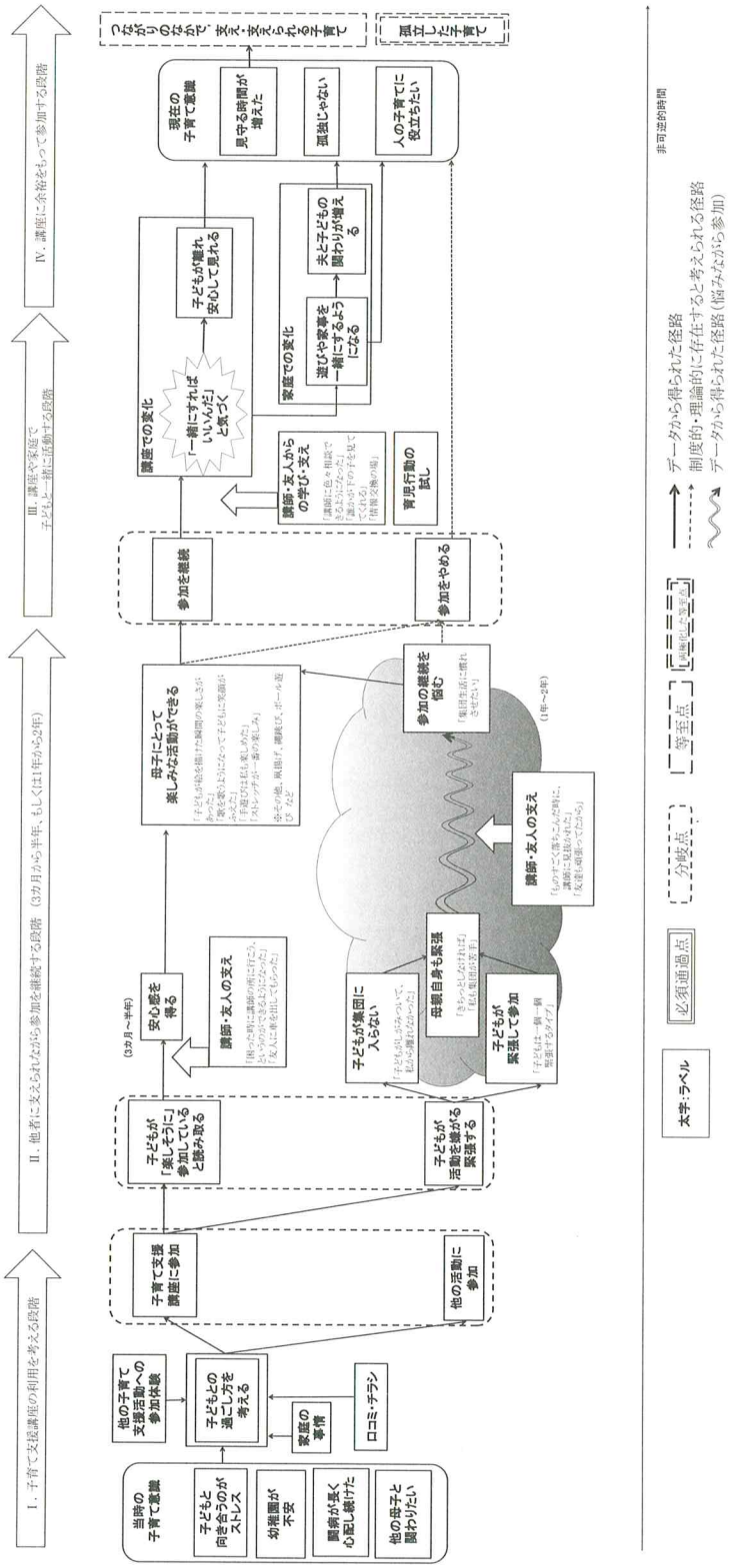

図1　子育て意識の時間的変容過程

表3　各段階における語りの一部

段階Ⅰ：子育て支援講座の利用を考える段階

ラベル	発話者	語りの一部
子どもと向き合うのがストレス	H	家にずっといたら子どもと向き合っていないといけないのでストレスがあった。
	C	子どもが嫌だったんです。
	A	どう過ごしていいかわからなくなって
子どもが離れない	H	お兄ちゃんがママから離れなかったんですよ。（中略）こういう場に行けば少しは離れられるかな、友達も出来るかあなと思って行ったんですよ。
	B	集団生活に慣れさせたい。
闘病が長く心配し続けた	E	子どもが病気をしたりして、大事にしすぎたかなというところがあって（中略）このままでは幼稚園に入っていくのに大変だなと思って。
他の母子と関わりたい	D	私の場合転勤族だから、行った先行った先で友達をつくらないと。
家庭の事情	A	高齢者が多い家族なので、子どもらしい生活をさせてやりたかった。
口コミ・チラシ	G	チラシをみて、人からも人気があるって聞いていたので参加しようって。
	H	（チラシを見て）ああこんなことが出来るんだ、家でできないことが出来るんだ。
他の子育て支援活動に参加体験がある	E	児童館もいろんなことをさせてくれるんですよ。ただ人がすごく多かった。

段階Ⅱ：他者に支えられながら参加を継続する段階

ラベル	発話者	語りの一部
子どもが楽しんで参加していると読み取る	H	楽しそうにしているのを見るのは、連れてきてよかったなと思いました。
安心感を得る	E	夏休み明けくらいから、安心感がありました。私の中で。
子どもが活動を嫌がる・緊張する	B	初めて行ったとき、子どもが私からしがみついて離れなかった。部屋に入らなかった。
母親自身が緊張	A	最初は行くたびに、今日のイベントはこれなのか。はあ疲れたって感じで帰ってきてた。きちっとしなければと思ってやってた。（中略）一年目って緊張して終わった。
	B	私自身も集団が苦手
参加の継続を悩む	B	なんかこう、参加をあきらめかけたこともあったけど、色々こう、友達にも支えてもらいながら。
講師・友人からの支え	B	しんどい時に先生に見ぬかれて、頑張り続けることに意味があるんだよっておっしゃったんです。先生が。
	D	他のお母さんと関わって情報交換できる場としてもよかった。同じ年頃の子どもたちと接するから共有できる部分があるのかなって。
親子にとって楽しみな活動が増える	H	それまで凧揚げをしたことがなかったので、自分で作れるのがびっくりだし、それが空に上がったのが二人ともびっくりで。目がきらきらしてて。
	C	歌を歌うようになって、子どもに笑顔が増えた
	B	一個一個活動があるじゃないですか、その中で好きな事だけでも楽しめたらいいかなと思うようになってきて（中略）はじめほんと必死だったから、一年以上かかってますね。
	D	子どもの成長を絵で見るのが、本当に楽しかったです。

段階Ⅲ：講座や家庭で子どもと一緒に活動する段階

ラベル	発話者	語りの一部
講師・友人からの学び・支え	A	遊びの投げを教えてもらった。
	H	私はほかのお母さんに相談してストレスが減って楽になることもあった。
育児行動の試し	D	（他の母親を見て）色々な接し方があるのがわかる。
一緒にすればいいんだと気づく	C	一緒にっていう気持ちが生まれたことが一番大きかった。
	A	お母さんも一緒にしてくれないとしないんだと思って、いきなりはい来なさい、座って見なさいじゃ絶対出来ないと思った。
家事や遊びを一緒にするようになる	D	家でやっぱり公民館でやったことをもう一度遊んでみることも出来るし。
	F	先生にお世話になっていて、何でも一緒に過ごすのが楽しくなったので、何でも一緒にやってみようと思って。

段階Ⅳ：講座に余裕をもって参加する段階

ラベル	発話者	語りの一部
子どもが離れ、安心して見れる	B	公民館の一番最後の時におおきなかぶ（劇遊び）をやったんですよ。絶対前に行かなかった子が行ったんですよ。一番最後に。
	H	子どもが、人がいっぱいでも（私から）離れられる勇気を持てたというか。
人の子育てに役立ちたい	E	だからもう私も、何かお手伝いがと思って。すごい助けてもらったなと思って。
夫と子どもの関わりが増える	C	私が変わって娘も変わった。そして3人ででかけようというのができるようになった。（中略）娘がパパっていうようになってから可愛いと思えるようになったって夫が言ってた。
見守る時間が増えた	E	講座に参加して、ちょっとだけ子どもを見守る時間は増えたような気がします。
孤独じゃない	D	孤独じゃないってことかな。（中略）自分だけじゃないっていうか。

の過ごし方を考える】ことに影響していると考えられる。

2）Ⅱ：母親と子どもが他者に支えられながら参加を継続する段階

段階Ⅱでは、母親と子どもが公民館での【子育て支援講座に参加】し友人や講師に支えられながら参加を続ける姿が示された。なお、講座に参加してからも、【他の活動に参加】した母親は、８名中４名に上り、段階Ⅰの必須通過点である【子どもとの過ごし方を考える】から【他の活動に参加】間はデータから得られた径路として直線矢印でつないだ（図１）。

段階Ⅱでは、参加の初期に分岐点があり、径路が二つに分かれた。一つ目の径路は、母親が【子どもが「楽しそうに」参加する様子を読み取る】ことが特徴であり、８名の母親のうち６名が該当した。これらの母親は、参加の比較的初期に、「子どもが笑うようになった（C）」「子どもが、〇〇先生（講師）のところに行くと言った（F）」などの講座に参加してからの子どもの肯定的な変化を読み取り、比較的初期に【安心感を得】ている。この時期の【講師・友人からの支え】では、「困った時に講師の所に行こう」という安心感が生まれたり、講座に参加するために「友人に車を出してもらったり（いずれもC）」したことなどが語られた。これらの母親の段階Ⅱに要した時間は、３カ月から半年程度であり、講座の開催期間である半年より短い。

もう一方の径路は、母親が講座での我が子の様子を【子どもが活動を嫌がる・緊張する】と読み取ったり、実際に子どもが活動に加わろうとしなかったことが特徴であり、８名の母親のうち２名が該当した。これらの母親は、参加の比較的初期に、【子どもが集団に入らない】様子や【子どもが緊張して参加】している様子を読み取っている。また、子どもだけでなく「私自身も集団が苦手（B）」「最初は行くたびに、今日のイベントはこれなのか。はあ疲れたって感じで帰ってきてた（A）」など【母親自身の緊張】感もみられた。実際に緊張感が持続し、悩みながら参加した期間は、Aさんの語りからは「１年目って緊張して終わった（A）」との語りより１年以上、Bさんは２年程度続いたものと思われ（図１　二重波線）、開講期間の半年を超過しており、【参加の継続を悩】みながら、参加し続ける様子が語られた。【講師・友人からの支え】として、Bさんは「友達がいたから続けられた」「すごく落ち込んだ時があったんですよ。（中略）その時に、先生が頑張ることに意味があるっておっしゃった」と語り、「徐々に」気持ちが変化していき「行き続けたら何とかなるかな」と思えたり、「好きな事だけでもやろうと思って」参加を継続したと語った。なお、Aさんはこの段階での具体的な講師や友人との関わりを語らなかった。

なお、より母親の体験に即した支援を考えるために、段階Ⅱに要した期間・母親の心情・母親から見た参加当初の子どもの様子をもとに、段階Ⅱにおける母親の体験について類型化を試みた。母親の体験の型は、以下に示す早期親和型、緊張持続型、隠れ・緊張持続型の３通りに分かれた（表４）。

ⅰ）早期親和型

母親６名（C～Hさん）は、段階Ⅱに要する期

表４　段階Ⅱにおける母親の体験の類型

段階Ⅱに要した期間	母親の心情	母親から見た当初の子どもの様子	体験の類型
３か月～半年	安心感を得る	楽しんで参加	早期親和型
１～２年	緊張	集団に入らない	緊張持続型
		緊張して参加	隠れ・緊張持続型

間が３カ月から半年程度であり、参加の早い段階で【子どもが「楽しそうに」参加していると読み取】り、安心感を得た体験をしていたため、早期親和型とした。また、早期親和型の体験をした母親は参加の継続を迷わずに選択していた。

ⅱ）緊張持続型

一方、【子どもが活動を嫌がる・緊張する】様子を見て取った母親２名のうち、【子どもが集団に入らない】ことで悩んでいたＢさんを緊張持続型とした。Ｂさんの緊張感の持続は、講師や友人からも分かるものだった。なお、自身も「集団が苦手」なタイプだと語っている。

ⅲ）隠れ・緊張持続型

Ａさんは、Ｂさんと同様に緊張感を持って参加していたが、段階Ⅱでの具体的な講師や友人との関わりを語らなかった。その理由として、「講師のしていることをまねながら」参加していたＡさん親子は活動に参加できていたため、緊張感の持続が講師や友人から気付かれにくかった可能性が考えられる。このため、Ａさんの体験を隠れ・緊張持続型とした。

しかし、段階Ⅱが進むにつれ、どの母子にも、描画や手遊びなど、それぞれの【母子にとって楽しみな活動ができ】、【参加を継続】し続ける過程が語られた。楽しみは母子にとって様々であるが、手遊びなど親子で楽しめる活動をみつけたり、子どもが描く絵を見ることが楽しみであったり、「家ではできない（D、H）」ような凧揚げやボール、縄を使った遊びに母子で満足したり、母親対象の活動であるストレッチが楽しみである様子が語られた。なお、【参加をやめる】場合も考えられるため、理論的に存在する径路（図１　点線矢印）とした。

３）Ⅲ：講座や家庭で子どもと一緒に活動する段階

段階Ⅲでは、継続して講座に参加するなかで、講座だけでなく家庭においても子どもと一緒に活動を楽しむ様子が示された。

この段階での、【講師・友人からの学び・支え】では、講師や友人との人間関係が深まるなかで、母親どうしが「情報交換（D）」したり、講師や友人に子育ての悩みを相談したりする姿もあった。また、子どもへの興味のもたせ方や言葉かけのやり方など、「アンテナをたてて（C）」講師や友人の子どもとの関わりをみながら、同じように我が子と関わってみる母親もおり、【育児行動の試し】とした。

そのような活動を続けるなかで、８名中７名の母親が、子どもとの活動を【「一緒にすればいいんだ」と気づ】いた旨を語った。子育て意識が大きく変わった気づきかと思われたため、図１でのラベルの枠を特徴づけて示した。

家庭でも変化が生まれ、「『ご飯作るからちょっと遊んでて』じゃなくて、『一緒にご飯作ろう』が増えました（E）」など、【遊びや家事を一緒にするように】なり、子どもと関わりながら過ごす時間が増えていく様子をすべての母親が語っていた。

４）Ⅳ：講座に余裕を持って参加する段階

段階Ⅳでは、親子関係の深まりや安定感が生じ、講座では【子どもが（母親から自発的に）離れ安心して見れ】た様子が語られた。家庭によっては【夫と子どもの関わりが増える】ようになり、「パパと歌を歌うようになった（C）」との語りもあった。

現在の子育て意識は、子どものやっていることを待てるようになり、【見守る時間が増えた】り、【孤独じゃない】と思えたり、母親が他の母親にアドバイスをしたり講座を紹介したりするなど、【人の子育てに役立ちたい】と考えるようになったことが複数の母親から語られた。なお、講座への参加をやめた場合でも現在の子育て意識に変容した可能性もあるため、理論的に存在する径路として【参加をやめる】から点線の矢印（図１）を引いた。

等至点として【つながりのなかで、支え・支えられる子育て】、両極化した等至点として【孤立

した子育て】を設定した。なお、【孤立した子育て】は、母親の語りをふまえ、理論上設定したものである。

Ⅳ　考察

今回の分析により、母親の子育て意識は、段階Ⅱで大きく二つの径路に分かれることが示された。また、段階Ⅱでどちらの径路を辿っても、段階Ⅲならびに Ⅳで気づきや子育て意識の変容がみられたことも新しい発見であった。

1）段階Ⅱの母親への支援

段階Ⅱに要する期間は、早期親和型は3か月から半年であったが、緊張持続型や隠れ・緊張持続型は1年から2年程度を要し、体験の質が異なるものだった。

段階Ⅱでの分岐点には、実際の子どもの様子に加えて、母親が子どもの様子をどう読み取るかが大きく影響していた。早期親和型の体験をした母親からは、段階Ⅱの初期での子どもが楽しそうに参加していた様子が比較的詳しく語られた。しかしその一方で、緊張持続型や隠れ・緊張持続型の体験をした母親は、子どもの様子は簡潔に語り、参加し続けた日々を「長い暗いトンネルのよう」（Bさん）と例え、母親自身の思いを主に語り、子どもの様子が母親の心情に与える影響の大きさが窺われた。

子どもの様子が母親に与える影響については、母親の状態にかかわらず子どもの要因が母親の精神保健に影響を及ぼすこと（Murray, L　1997）が知られている。また、岡村・平松（2013）によると、子育て支援の講座において、我が子とともに絵本の読み聞かせに参加した母親は、我が子を通して周囲への“気配りや配慮”をするために、母親の緊張・不安が保たれるとの報告がある。これらのことは、子どもが講座の活動になじみにくかった場合、もしくは、なじみにくいと母親が読み取った場合に、どの母親にも強い緊張や不安が喚起される可能性があることを示唆している。Aさん、Bさんは、自身の緊張感の高さや集団活動への苦手感を語っているが、そのような思いは子どもの様子からも喚起されたものである可能性も十分考えられる。

Bさんは、最も落ち込んだ時に講師から「見抜かれて」励まされた体験や「友人がいたから頑張れた」体験を語っているが、支援者が普段から母親との関わりを持ち関係づくりをすることや、母親が辛そうな様子を見せた時に、母親との関わりを増やして労いを伝えること、子どもの成長を伝えて、母親への支援を手厚くすることが急がれる。

さらに、子育て支援の場には、隠れ・緊張持続型の体験をしたAさんのような、一見活動に馴染んでいるように見えるが、心の中では緊張感を長い間抱えて参加している母親や子どもは少なからずいると想像される。支援者は、母子が活動に参加できていたとしても、母親が複雑な思いを抱えている場合があることを心に留め、母子への配慮が根底にある丁寧な支援を行っていく必要がある。

2）段階Ⅱでの体験が段階Ⅲでの気づきにつながる

段階Ⅲでの【「一緒にすればいいんだ」と気づく】体験は、ほとんどの母親が語っており、子育て意識が大きく変容した箇所だと思われた。

気付きが生じた時期は、講座への継続的な参加体験の後である。ここに、子育て支援の意義があると思われる。仮に、講座に参加する母親たちに、“親子で一緒にすればよい”ことを、“知識”として教えたとしよう。そのような知識だけで、子育て意識が変容したり、母子を支えたりすることができるだろうか。恐らく、そのような知識を得た母親たちの多くは、試みるものの実際には上手くいかず、自分自身を責めたり孤独感を深めたりするのではないだろうか。今回の図に示したように、支援を求めて参加した母子が、継続的な親子での体験を積み重ねていった結果、気づきが生まれたと考えるのが妥当であろう。さらに、この気づきは経験から生じたものなので、“自助能力”（神田橋　2013）として機能し、母親をこれからも支え

得るものになると予想される。したがって、子育て支援の場で支援者ができることは、親子が体験できる場と求めに応じた援助を提供することだと言える。

なお、ここで述べた体験は、多様な遊びを通した親子のふれあいだけでなく、母親の心理面の体験が含まれると考える。たとえば、子どもの成長に喜びや葛藤を抱えたり、講師や友人の支えを感じたり、母親自身の楽しみを見つけたりすることなどである。特に、AさんとBさんのように時間をかけて講座になじんだ母親にとって、段階Ⅱでの継続的に体験ができる場や見守り支える援助の提供は、子育て支援に不可欠な要素だと思われる。

3）講師と他の母親からの支え

さて、参加の全体を通して、すべての母親が語っていることは、講師と他の母親からの支えがあったことである。講師は、「子どもとの接し方」や「子どもにあわせてやっていくこと（A）」を教えてくれる存在であり、また、緊張感が高かったBさんに特技であるピアノのミニコンサートを実施する機会を作ったりし、母親自身の活躍の場や楽しみを増やすような関わりをしていた。

他の母親からの支えとして、「情報交換できたのがよかった（D）」ことや、「あきらめかけたときもあったけど、色々友人に支えてもらいながら（B）」参加できたこと、「下の子が泣いていても誰かが見てくれる（C）」ことで安心して通えたことなどがある。

世帯外で育児を支えてくれている人が多いほど、母親の育児不安度が低くなり、育児満足度が高くなるという報告がある（松田　2008）。子育て支援では、参加した母親が支援者や他の母子と自然につながれるように、関わり方やプログラムを工夫することが求められる。今回の対象者である母親たちも、段階ⅡないしⅢで育児を支えられた体験を経て、段階Ⅳで人の子育てに役立ちたいという思いを持つようになったため、子育て支援は、つながりのなかで育児を支え合う文化を伝承する役割を担うことも期待される。

4）講座への参加人数・形態・活動内容

今回のインタビューでは3名の母親が、講座の参加人数について言及しており、15組程度の参加者について「講師の目が届きやすい」「講師が母子を把握してくれる」「他の母親と友達になりやすい」と語っている。母親にとっては、講師が自分や子どものことをよく理解してくれている、子どもを一緒にみてくれている、寄り添ってもらっているという、講師との一体感をもてることも、安心して参加できることにつながると思われる。なお、クローズドグループで活動する形態については、同じ場所、同じ仲間と定期的に時間をともにするなかで、講師や友人たちと関係が深まっていき、講座での体験や子どもの成長や育児への思いを分かちあうことができるため、グループ内の関係が良好であれば、つながりを作りやすい形態だと思われる。

活動内容については、段階Ⅱの後半で【母子にとって楽しみな活動ができ】たことが語られたが、講座では毎回数種類の遊びを親子で体験できるようになっているため、子どもや母親が楽しみな活動を見出しやすくなっていると思われる。また、種々の遊びを通して親子が多様な関わりをできるため、母親が我が子の好きな遊びや表情の変化、成長に気づきやすかった点も挙げられる。

5）家族の変化

親子関係の改善は母子だけではなく、夫と子どもの間にも認められた。父親が育児に参加することは母親を心理的に安定させるといわれるが、今回の分析により、母親や子どもの成長が父親の育児への参加意欲を引き出し、父親の成長を促進する可能性が示唆された。子育て支援の講座に参加した母子を支えることが、父親不在の育児環境を改善する糸口の一つになり得るものと思われる。

6）ＴＥＭについて

分析法としてのＴＥＭについては、ＴＥＭ図は視覚的に理解しやすいため多様な職種と連携、協働する際に情報共有に有用なツールになり得ることや、予防としても役立つ可能性を述べた（岡村・湯澤　2014）。今回複数の対象者を分析しＴＥＭ図を描くことにより、新たに明らかになったことは、段階Ⅱでの母親の体験の質、段階Ⅱに要する期間が異なっていたことである。この結果は、母親の心情や状況を想像して支援する際に役立つと思われる。

Ⅴ　まとめ

ＴＥＭによるインタビューを分析した結果、母子が時間をともにするなかで母親の子育て意識が変容し、つながりの中で、支え・支えられる子育てへと変容していく過程が示された。この過程のなかで、母子で豊かな体験ができる場の提供や母親への講師や友人の支えが、子育て意識の変容や、さらには家族関係の改善に影響を与えているものと考えられた。このように支えられてきた母親が、主体的に他の母や他児の育ちを支えるなど、他の母子に対して文化的・社会的影響を持つよう変容していた。

今後は、子育て支援に参加しなかった母子や参加をやめた母子にも調査を行うことで、広く実践に役立つ知見を得、子育て支援のあり方を提言して参りたい。

付記

インタビューを快諾しご協力下さったお母様方に心よりお礼申し上げます。また、本論文執筆に際しまして、貴重なご意見、ご指導を下さいましたノートルダム清心女子大学　平松清志先生、湯澤美紀先生、名古屋市立大学　上田敏丈先生に深謝いたします。

参考文献

1）青木紀久代（編著）『親のメンタルヘルス－新たな子育て時代を生き抜く』ぎょうせい、2009.

2）東山弘子「子育て支援－臨床心理士に求められる親支援」臨床心理士子育て支援合同委員会（編）『臨床心理士のための子育て支援基礎講座』創元社、2010、pp20.

3）岩堂美智子「母子心理臨床と子育て支援－大阪市立大学「どんぐり教室」の二八年」岩堂美智子(監修)松島恭子(編)『臨床心理の子育て支援－その理論と実践事例』創元社、2008、pp267.

4）神田橋條治（著）黒木俊秀・かしまえりこ（編）『神田橋條治医学部講義』創元社、2013、pp229-231.

5）内閣府『子ども・子育て支援新制度（http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/）』2012.

6）内閣府『平成26年度子ども・若者白書（全体版）』2014.

7）Murray, L. The effect of Infant's Behavior on Mental Health, *Health Visitor*, 70（9）、1997、334-335.

8）松田茂樹『何が育児を支えるのか－中庸なネットワークの強さ』勁草書房、2008、pp85-115.

9）岡村幸代・平松清志「子育て支援における絵本の読み聞かせが参加者としての母親に与える心理的影響」『読書科学』、55（1、2）、2013、1-12.

10）岡村幸代・湯澤美紀「子育て支援に参加した母親の「子育て観」の時間的変容過程」『保育の実践と研究』、18（4）、2014、58-66.

11）サトウタツヤ「複線径路・等至性モデル　人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」『立命館人間科学研究』、12、2006、65-75.

12）サトウタツヤ（編）『ＴＥＭではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざし

て』誠信書房、2009.
13) 篠田美紀「乳幼児健診からみた子育て支援」岩堂美智子（監修）松島恭子（編）『臨床心理士の子育て支援』創元社、2008、pp47.
14) 上田敏丈「保育援助に関する幼稚園教諭のふりかえりプロセス―異なるティーチング・スタイルに着目して」『乳幼児教育学研究』、20、2011、47-58.
15) 安田裕子・サトウタツヤ『ＴＥＭでわかる人生の径路―質的研究の新展開』誠信書房、2012.